



西牧大使とプレス一行を躍動的な民族ダンスで歓迎する生徒たち（ナミビア北部のサン族を中心とした地域への草の根支援）
 令和4年9月28日～30日、当館は「開発協力プレスツアー」を実施しました。ツアー参加者は、当地メディア3社（Namibian Sun 紙、Namibian 紙 & Desert Radio、New Era 紙）からそれぞれ記者1名の計3名、大使館より西牧大使他2名、JICA 支所より洲崎支所長他1名、合計8名でナミビアの首都ウイントフックからツアーに出発しました。視察先では更にナミビア国営放送局（NBC）テレビもツアーのほぼ全日程に加わり取材しました。視察地はナミビア北部3州における7か所（大使館が実施する「草の根無償資金協力」関連4か所、JICA が実施する「技術協力プロジェクト」関連3か所）であり、それぞれの視察地の概要とプレスの取材振りは以下のとおりです。なお、本プレスツアーの目的は、当国世論に大きな影響力を有する当地主要メディアを通じて我が国の経済協力につき大々的に報道してもらうことにより、ナミビア国民への対日理解・我が国の開発協力への理解の向上を目指すものとなっています。

今回のプレスツアーによるテレビ、ラジオ、新聞、フェイスブックによる報道件数は合計11件となり、ナミビア国営放送局（NBC）がナミビア全国に本件を報じた他、Namibian Sun 紙では、1件の報道に対するフェイスブック動画において6万6千件のいいね！、266件のコメント、再生回数は24万回（ナミビアの約250万人の人口の9.6%に相当）に達しています。



草の根無償資金協力

令和2年度草の根無償「オシャナ州オングウェディバ地区エルワ特別支援学校視聴覚障害者校教室建設計画」:



視聴覚障害のある生徒が日本国旗を掲げて歓迎



NBC テレビほかの取材を受ける西牧大使

同校は1973年に当時の「南西アフリカ」(南アによるナミビアの植民地時代の名称)で聴覚障害のある生徒のための初の学校として設立されました。その後、同校には知的障害児童、視覚障害児童も加わり、計3種類の障害のある生徒を寄宿舎形式で受け入れる学校となり、今日に至ります。現在のナミビアには公立の聴覚障害者のための特殊学校が2つしかなく、同校はそのうちの1つで、主に北部の学習者を対象としていますが、全国から入学希望者が絶えません。生徒数は約200名、50年近く前に建てられた教室の老朽化は著しく、教育に支障を来していましたが、当館が実施する草の根無償資金協力により、4教室と1つの倉庫で構成される新校舎を建設するために63,581米ドルが供与されました(引渡式は2021年11月9日に実施済み)。

視察にはイルマリ(Hon. Elia Irmari)オシヤナ州知事が終始立会い、繰り返し日本への謝辞が述べられました。メディアは現地のNBCテレビも加わり活発に取材を行う中、メンタル不調の母親による不幸な事件を乗り越えた少年が聴力を失ったものの、前向きに生きようと同校で勉学に勤しんでいる様子もナミビア全土に報道されました。



草の根無償資金協力

令和2年度草の根無償「オムサティ州オカハオ地区オキホロンゴ小学校教室建設・衛生改善計画」:



極めて高温となるタン屋根の旧教室での取材



草の根無償資金協力で建設された新校舎前での取材



西牧大使に対して、トイレ棟ができたため子供たちが大変興奮した旨の説明をする校長先生



同校は1991年に設立され、現在の生徒数は約110名。開校以来、教室は2教室しかなく、大半の生徒はタン板の仮設教室で学習するという厳しい学習環境に置かれていました。また、トイレ設備が全くなかったため、休憩時間になると生徒や教職員は学校周辺の茂みの中で用を足すしかない状況でした(季節によっては葉が枯れて茂みすら目隠しにならない)今般の当館が実施した草の根無償資金協力により、2教室と1倉庫及びトイレ棟を建設され、そのため、53,467米ドルが供与されました。2教室の供与により学校の教室は2倍となり、地域の教育に大きなインパクト

を与えています(引渡式は2021年11月10日に実施済み)。草の根無償資金協力で建設されたトイレ棟は、特に女子生徒の就学継続に大きく貢献しています。

視察にはイスブ(Mr. Benny Eiseb)オムサティ州教育・芸術・文化局長が立会い、草の根支援による地域への多大なる貢献について謝意が述べられました。メディアはツアーに参加している3社に加え、視察地の NBC テレビ支局のクルーも加わり、合計4社による取材活動が活発に行われ、報道されました。なお、生徒の多くはサン族(注:研究者やサン人自身の間では、カラハリの叢林に住む自由人という意味を込めてブッシュマンとも呼ばれる)という少数狩猟採集民族に属します。

気温38℃の中、西牧大使一行もタン屋根の仮設教室に入ってみました。教室内のあまりの暑さに(体感温度は約50℃)2~3分しか室内に留まれません。



草の根無償資金協力

令和元年度草の根無償「オハングウェナ州オンドベ地区エガンボ小中併設校教室建設計画」:



(左)スピーチする西牧大使を取材する NBC テレビ(背後は旧教室) (右)給食用キッチン棟オープニングの様子



旧教室の外観



旧教室の内部



新教室の外観



新教室の内部

同校は1955年に設立され、現在の生徒数は約300人。教室が不足していたため、一部の生徒はトタン屋根と泥の壁でできた日中は極めて高温になる仮設教室で学習していました。このような状況に鑑み、2018年に同校からナミビアの首都ウイントフックに所在する約30か国の大使館に支援を要請したところ、日本大使館だけから反応があった由です。その後の日本大使館と同校の調整により、草の根無償資金協力を実施することとなり、4教室と1倉庫からなる新しい校舎を建設するために66,161米ドルの供与を行いました。また同校は最近、主に為替差益で生じたプロジェクト残高を活用して、待望の衛生的な給食用キッチン棟を建設し、本プレスツアーに合わせて同建屋のオープニングが西牧大使により執り行われました(校舎の引渡式は2021年3月16日に実施済み)。

視察には、ハマトウイ(Mr. Isak Hamatwi)オハングウェナ州教育・芸術・文化局長が立会い、日本の支援に謝意を述べるとともに、同給食用キッチン建屋のオープニングをともに祝いました。



草の根無償資金協力

平成30年度草の根無償「オハングウェナ州オンドベ地区デビッド・シンゴ小中併設学校建設計画」:



巨大な日の丸が描かれた新校舎



生徒たちと交流する西牧大使と JICA 洲崎支所長

同校は、1976年にアンゴラとの国境近く(車で約45分の距離に位置する)に設立され、現在の生徒数は約550名。教室が不足していたため、一部の生徒はトタン屋根の小屋で勉強しており、日中はオープンの中にいるような過酷な学習環境でした。また、雨期には雨風が吹き込み授業に支障を来していました。そのような状況を鑑み、当館が実施

する草の根無償資金協力にて、4教室と1倉庫からなる新しい校舎を建設するために、65,031米ドルの供与を行いました(引渡式は2021年3月16日に実施済み)。

視察は姉妹校の関係にある前述した近隣のエガンボ小中併設校と、ほぼ同じメンバーが移動して実施され、メディアも同様の取材活動を行いました。なお同校も前述のようにナミビアに所在する全ての大使館宛てに支援要請のレターを送ったものの、本要請に応じたのは唯一、日本大使館だけであった由で、視察時の式典出席者、父兄などからも非常に感謝されました。なお、JICAは現在9名の協力隊員をナミビアに派遣中ですが、その多くは小学校で教師として活動中です。今後はJICAボランティア派遣事業と草の根無償資金協力を組み合わせたオールジャパンによる活動協力も期待されます。



JICA技術協力プロジェクト

令和3年度 JICA 技術協力事業「北部ナミビア小規模農家生計向上プロジェクト」(オハングウェナ州エナハナ地区) :



プロジェクトで研修を受けたナミビア人スタッフを取材する記者たち(左側の3名)。右端はプロジェクト専門家。

JICAが実施する本プロジェクトは2027年まで6年間実施される予定であり、今年が実施2年目にあたります。プロジェクトの概要は、「市場志向の農業」であり、中小農家が市場にどのようにアプローチするかが重要とされています。従来のJICA技術協力プロジェクトは、技術指導に重点がおかれており、農家にとっては押し付けられている感が否めませんでした。そこで、本プロジェクトではビジネスに重点を置いて心理的にも農家のやる気を起こさせる取組を実践しています。従来のほとんどの農家は市場のニーズも調べずに、自分が栽培したいものを、栽培したい時期に、栽培したい量だけ生産していましたが、本プロジェクトによる指導で、農家が直接市場調査をするようになり、同業者の生産物を見て自分の栽培技術のレベルを知る機会にもなっています。プロジェクトの具体的なアプローチには、(ア)農家にプロジェクトのゴールを提示、(イ)農家の意識向上、(ウ)農家による意思決定、(エ)農家の栽培技術向上、という4つの段階を設定しています。この革新的とされるアプローチ法は、2007年ケニアにおけるJICA園芸プロジェクトに従事し

た日本人 JICA 専門家が開発したものであり、今やアフリカ26か国、アジア5か国及びいくつかのラテン・アメリカにも普及しています。本プロジェクトでは小規模農家をターゲットとしており、北部4州(オハングウェナ州、オムサティ州、オシャナ州、オシコト州)で実施しています。本プロジェクトの一番の特徴は、園芸作物プロジェクトの手法を家畜にも広げた点であり、園芸作物に3割、畜産に7割程度の重点が置かれています。

視察現場となったエナハナ地区の農業普及局事務所では、プロジェクトで研修を受けたナミビア人職員に対してメディアから積極的な質問が行われました。興味深かったのは、記者たちがプロジェクトの支援としてイメージしたのは、単に家畜などを農家に「供与」することでありましたが、本プロジェクトでは農家の「やる気を含めた意識向上」に重きを置いていることを理解することに時間を要したことでした。それだけに記者たちは、数年後に判明するであろうプロジェクトの成否について今から強い関心を抱き始めていました。



JICA技術協力プロジェクト

令和3年度 JICA 技術協力事業「北部ナミビア小規模農家生計向上プロジェクト」(オムサティ州オカロンゴ地区) :



JICA 技術協力プロジェクトで指導を受けている養鶏家にインタビューするナミビアン紙 & デザートラジオの記者



プレスツアーは一隅を照らすごとく関係者のモチベーションを高める効用も認められました(養鶏場で西牧大使と記念撮影) 視察内容は養鶏を始めたばかりのグループへのインタビュー及びプロジェクトの指導を受けた養鶏場を視察しました。



JICA技術協力プロジェクト

令和3年度 JICA 技術協力事業「北部ナミビア小規模農家生計向上プロジェクト」(オシャナ州オングウェディバ地区):



プロジェクト事務所の外観



ナミビア側カウンターパートを取材するメディアたち

視察内容は、プロジェクト事務所の視察とプロジェクトのナミビア側カウンターパート(ネクワヤ(Mr. Leevi Nekwaya) オシャナ州農業・水・土地改革省農業科学主任)への表敬でした。



総括



取材中のカメラマン

当地メディアを伴い日本の支援現場を報道してもらうことは、ナミビアの人々に日本の支援を知ってもらうのみならず、ナミビアの人々自身に自国の地方の現状を認識してもらうという2つの重要な意義が認められました。さらに当地各国外交団にも日本の支援を広報するとの意義もあり、西牧大使は実際に他国外交官などから日本の支援につき照会を受けました。前述のように広報効果の高いプレスツアーは極めて有意義なため、今後も継続することで日本のプレゼンス向上が期待できます。今後も、日本の顔の見える支援を実施して参ります。

関連リンク(外部サイト)

NBC Digital News Facebook: <https://www.facebook.com/NBCDigitalNews/>

Namibian Sun Newspaper Facebook: <https://www.facebook.com/namibiansun>

New Era Newspaper: <https://neweralive.na/posts/govt-lauds-japan-for-schools-support>

New Era Facebook: <https://www.facebook.com/NewEraNewspaperNamibia/>